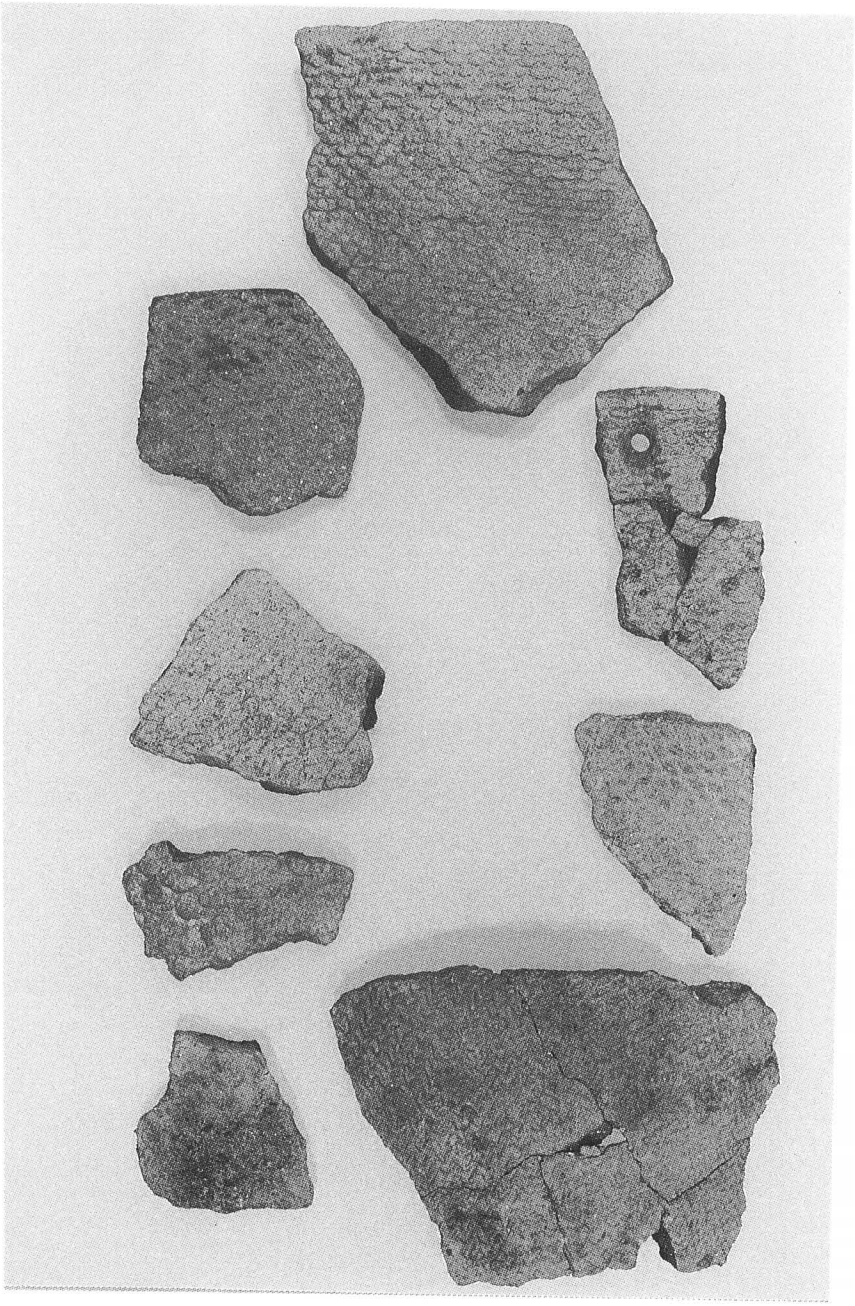
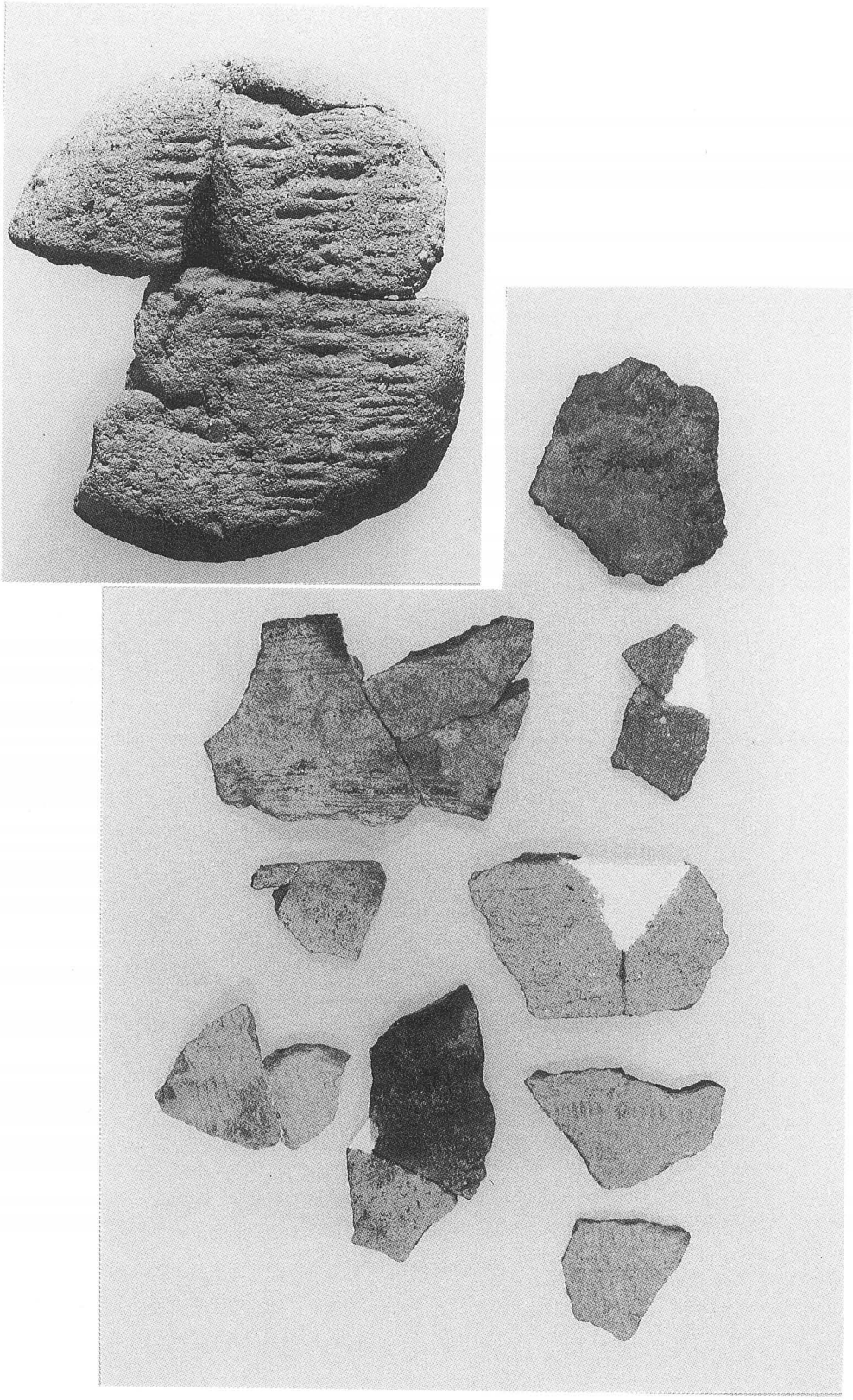
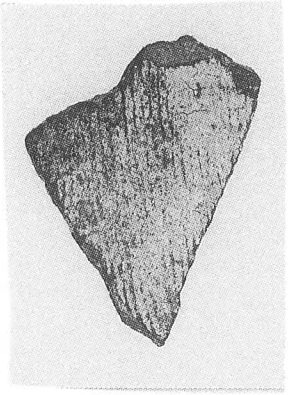
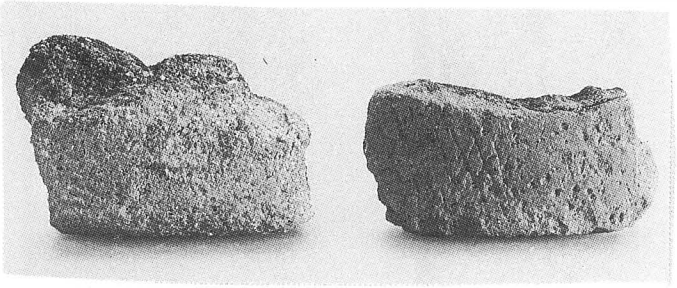


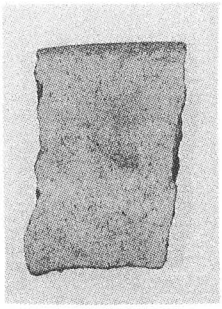
出土遺物（縄文土器）

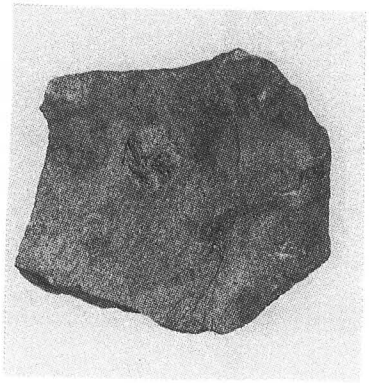


出土遺物（縄文土器）

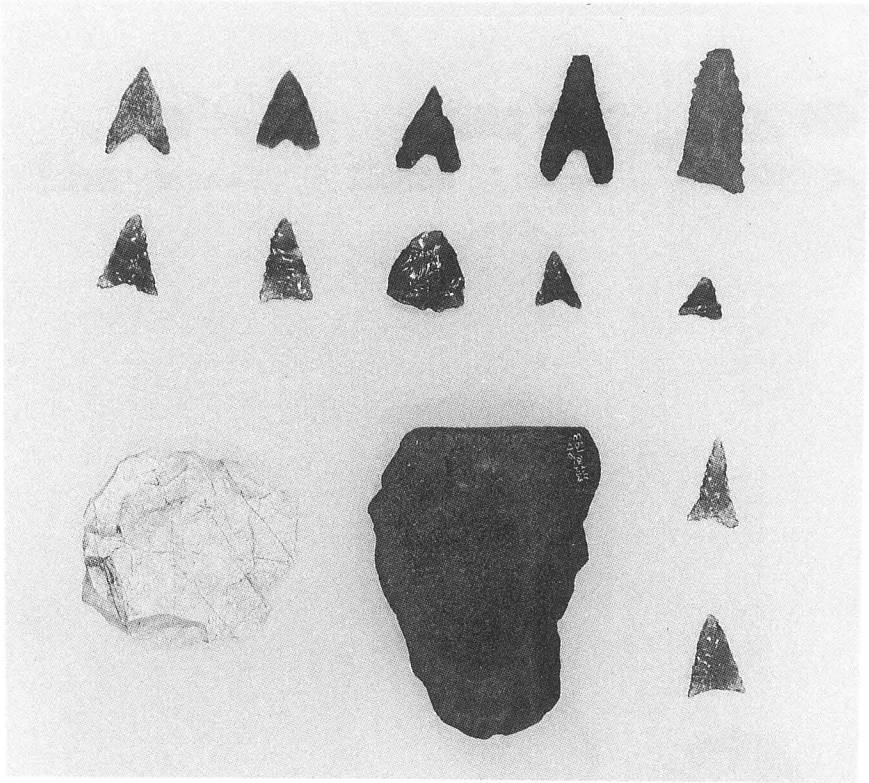


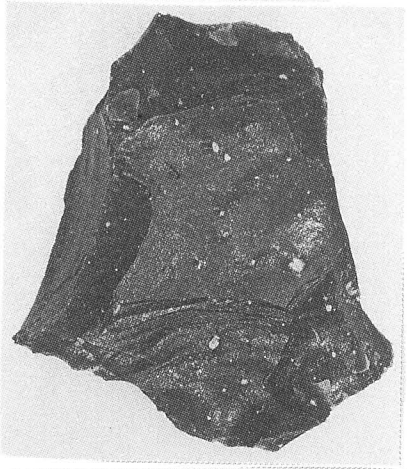


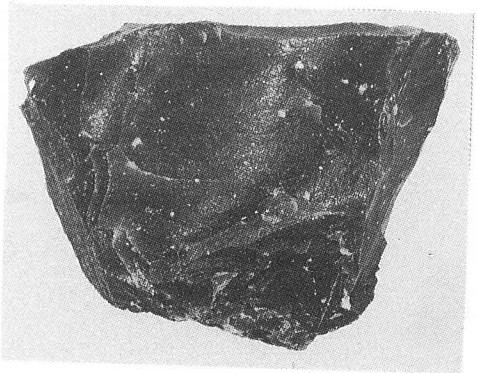


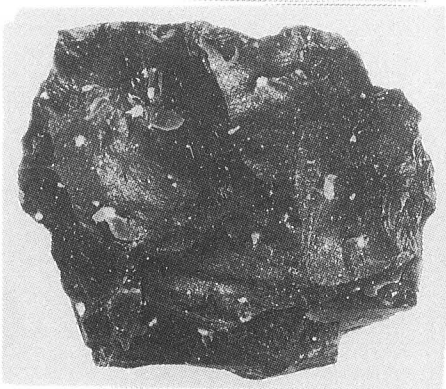


出土遺物（縄文土器・中世土器）

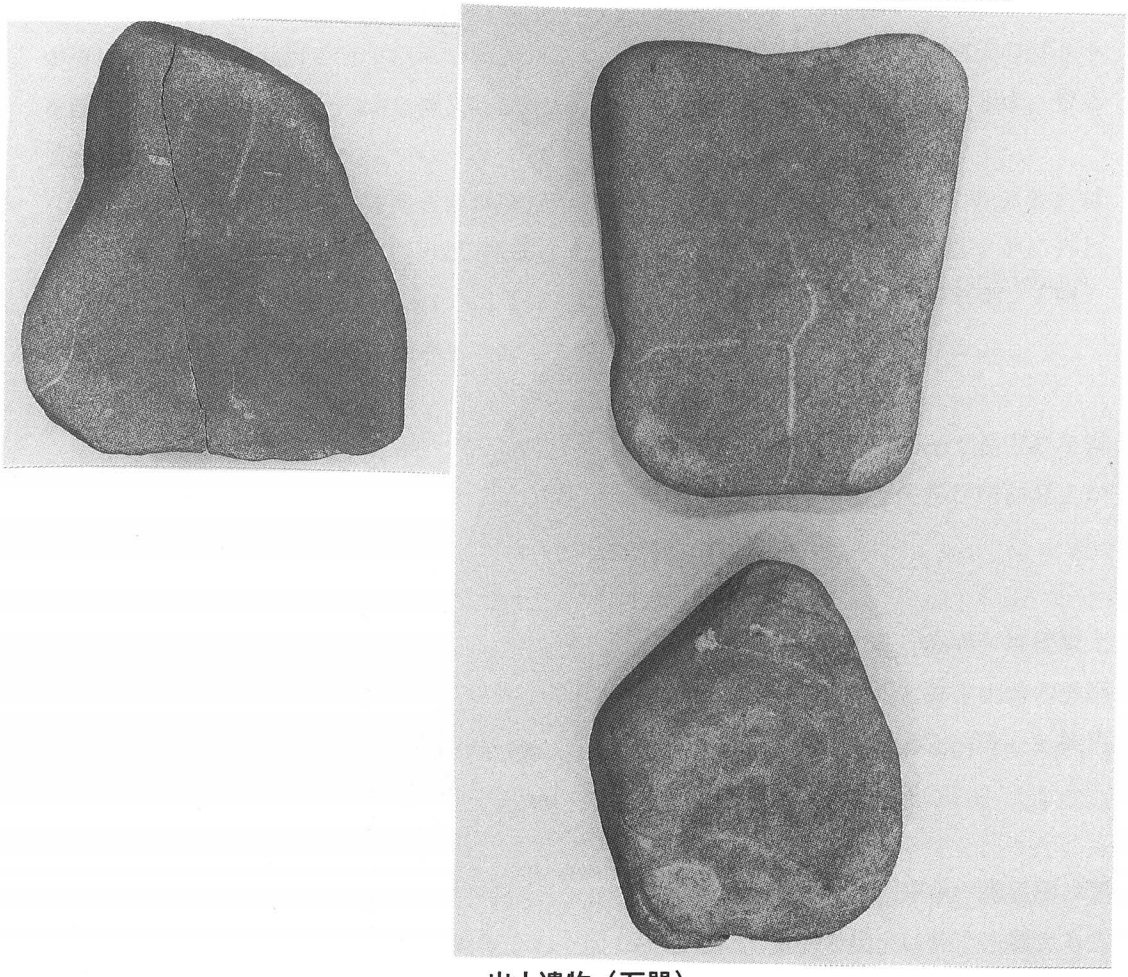




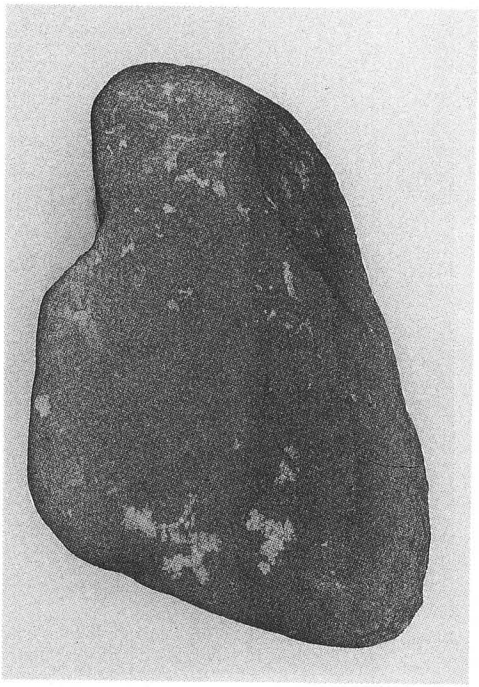




出土遺物（石器）



出土遺物（石器）



出土遺物（石器）

第Ⅴ章　　権現谷第１遺跡

第１節　調査の結果

権現谷第１遺跡は前畑第２遺跡から、やや下りながら北方にのびる舌状の台地上に位置する。調査面積は約1000㎡に至った。層位は上層から耕作土・黒色土・赤ホヤ堆積・黒褐色土（硬質）・褐色土を基本とする。このうち黒色土層は弥生時代の、黒褐色土層及び褐色土層は縄文時代早期の遺物包含層である。遺構検出は赤ホヤ層上面及び褐色土層上面においておこない、縄文時代の竪穴住居を１棟と弥生時代後期の竪穴住居２棟、時期不明の竪穴住居１棟のほか土坑等を検出した。

尚、調査の段階でＢ・Ｃ・Ｄ区の３区を設定したが、ここでは一括して報告する。

〔SA－01〕

調査区の北側に位置する。赤ホヤ堆積層は開墾により残存していないため、黒褐色土の上面で検出した。330㎝×350㎝、深さ（検出面から）30㎝でやや崩れた円形を呈し、床面中央に約40㎝と22㎝のピットがみられる。また、住居を取り囲むように20㎝前後のピットを配する。暗褐色の覆土内から縄文時代前期の土器片が８点とすり石が１点（30）、曾畑式土器が１点出土した。

（１～６）は内外面を斜方向または横方向の条痕により調整するもので、（１・２）は他に比べて厚みを有する。（３）は口縁部（４）はその付近で、ラッパ状に緩やかに外反する。(11・12）は縄文を施すもので、(11）は緩やかに外反する頸部とみられる。(14）は並行する沈線をやや粗雑に組み合わせるもので、内面はナデにより仕上げる。

〔SA－02〕

一部を攪乱により消失するが、275㎝×466㎝、深さ（検出面から）約30㎝で長方形を呈し、床面の壁寄りに約25㎝～50㎝のピットを４か所配する。黒色の覆土内及び床面直上から弥生時代後期初頭の土器片（20～24）等が出土した。

〔SA－03〕

329㎝×414㎝、深さ（検出面から）約24㎝でやや歪な長方形を呈する。赤ホヤ堆積層上面において検出した。遺物は黒色の覆土内から曾畑式土器が２点（18）と弥生土器の甕胴部の破片が１点、石皿が１点（29）出土した。また床面精査時に土坑（SC－05）を検出した。

〔SA－04〕

510㎝×512㎝、深さ（検出面から）約15㎝で歪な隅丸方形を呈する。赤ホヤ堆積層は開墾により残存していないため、黒褐色土の上面で検出した。遺物の出土は無く、覆土も大

半が攪乱を受けており、埋没時期等も明確にはできなかった。

〔SC－05〕

66cm×156cm、深さ（検出面から）約15cmでやや歪な隅丸の長方形を呈する。

〔SC－06〕

64cm×86cm、深さ（検出面から）約15cmで歪な楕円形を呈する。遺物の出土は無かった。

〔SC－07〕

38cm×38cm、深さ（検出面から）約15cmで方形を呈する。遺物の出土は無かった。

〔SC－08〕

253cm×－cm、深さ（検出面から）約58cmで歪な隅丸方形を呈する。遺物の出土は無かった。これを含めて以下の遺構については、すべて黒褐色土上面において検出したものである。

〔SC－09〕

142cm×198cm、深さ（検出面から）約51cmで歪なプランを呈する。黒曜石の剥片が2点出土した。

〔SC－10〕

262cm×300cm、深さ（検出面から）約56cmで歪なプランを呈する。覆土内から条痕文土器が32点、撚糸文土器が1点と黒曜石3点を含めた剥片が13点出土した。

（7・8・9・）は内外面を斜方向の貝殻条痕により仕上げるもので、いずれも胴部である。(10) は粗雑な撚糸文を施し、内面は貝殻条痕ののちナデにより仕上げる。

〔SC－11〕

90cm×109cm、深さ（検出面から）約16cmで方形を呈する。遺物の出土は無かった。

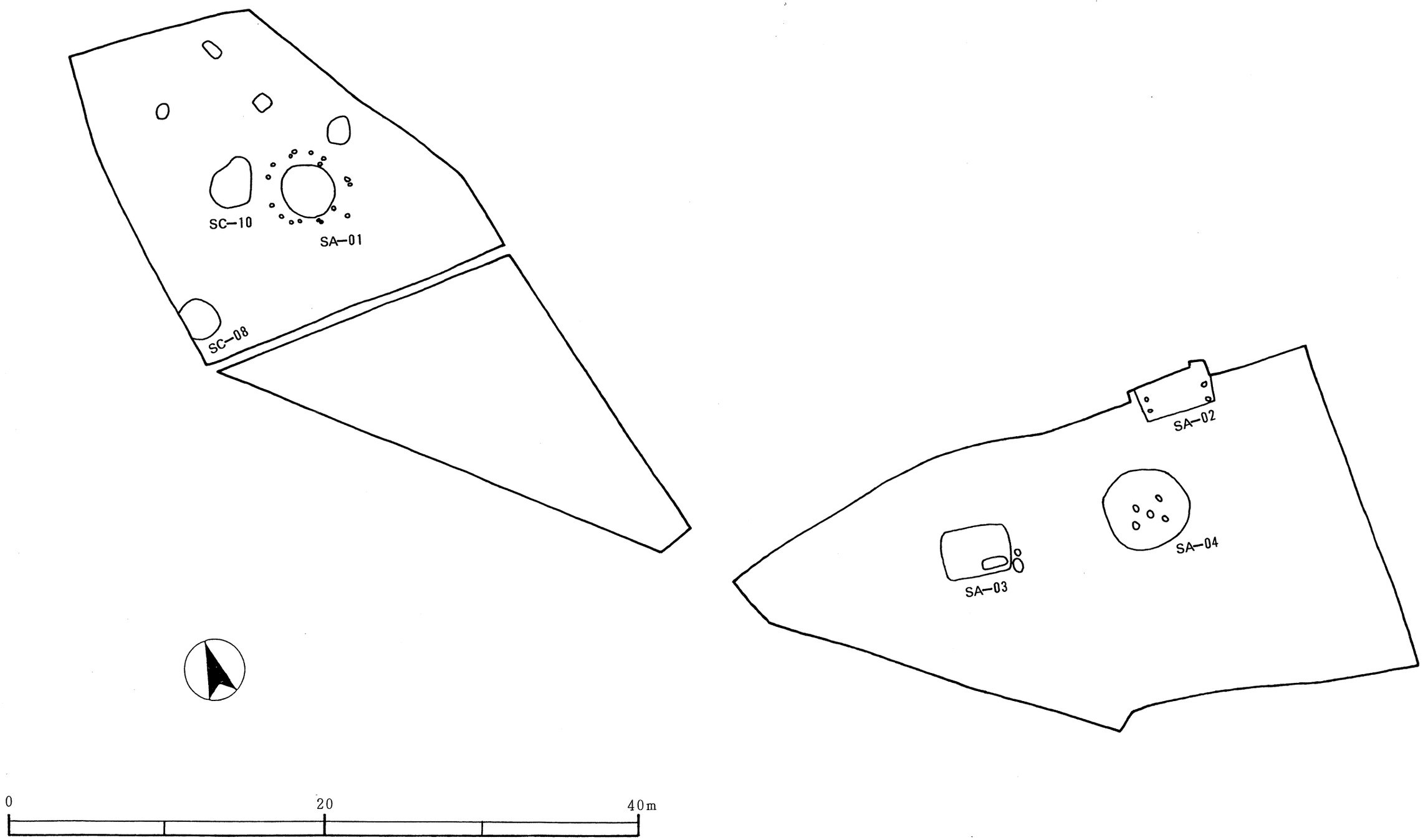
〔SC－12〕

80cm×143cm、深さ（検出面から）約20cmで歪な長方形を呈する。遺物の出土は無かった。

〔SC－13〕

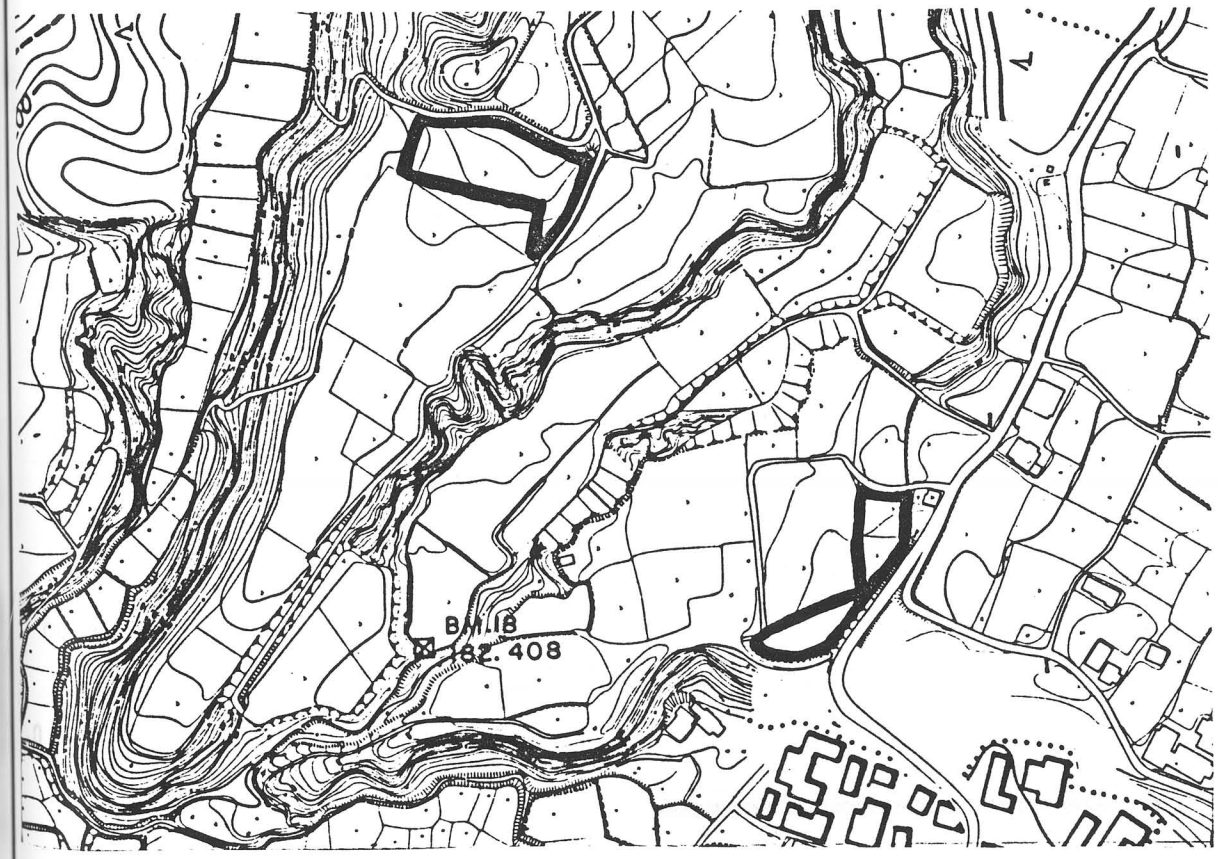
72cm×107cm、深さ（検出面から）約18cmでやや歪な楕円形を呈する。遺物の出土は無かった。

その他、包含層からは縄文時代早期の土器片（いずれも細片）、石鏃2点（25・26）と石匙1点（27）のほか、剥片等が出土し、風倒木とみられる落ち込みから曾畑式土器が3点（16・17・18）出土した。(25) は姫島産黒曜石で基部外側に突起をつくる。(26) は凹基無頸鏃で先端と基部片側を欠損する。

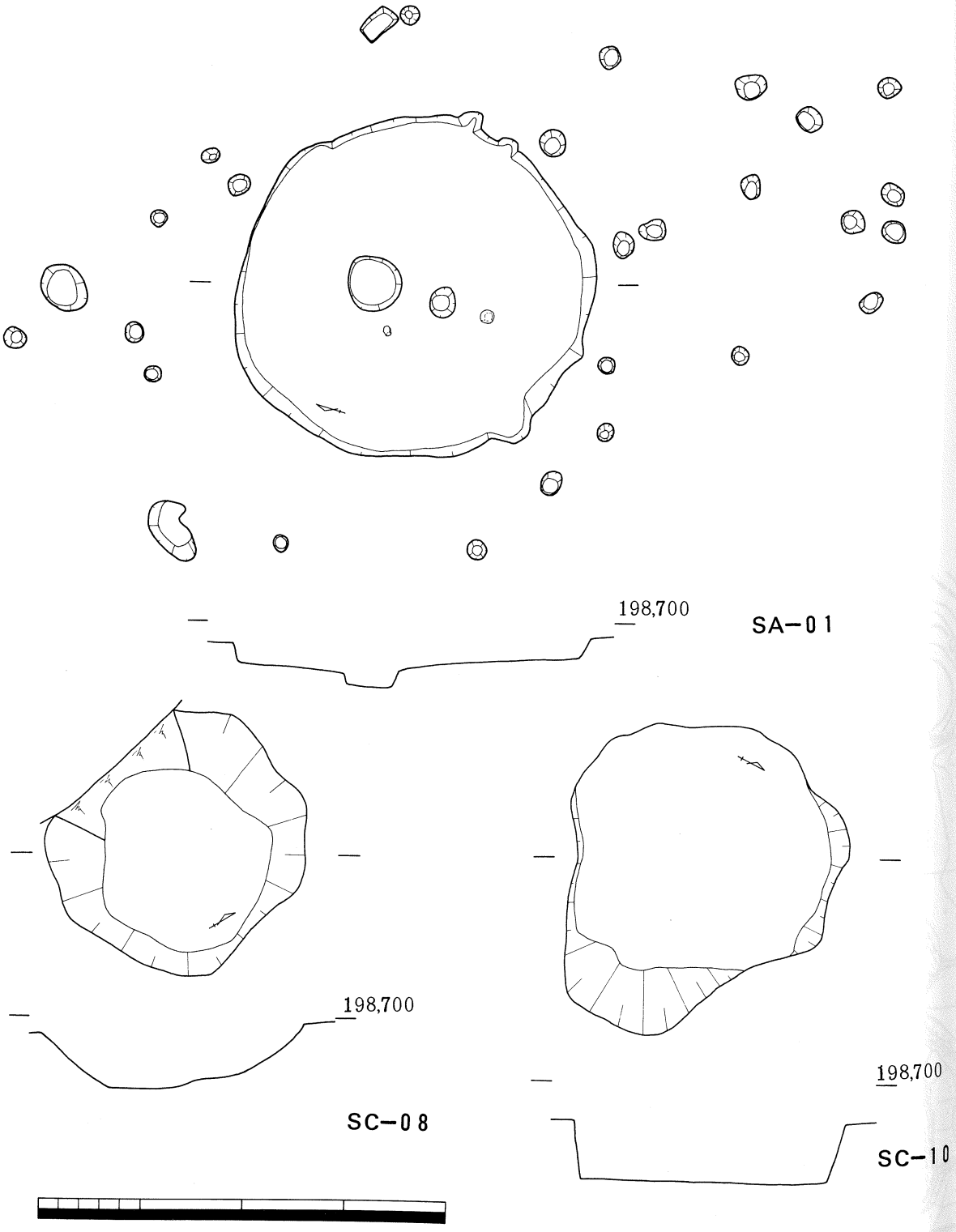


第56図　遺構分布図

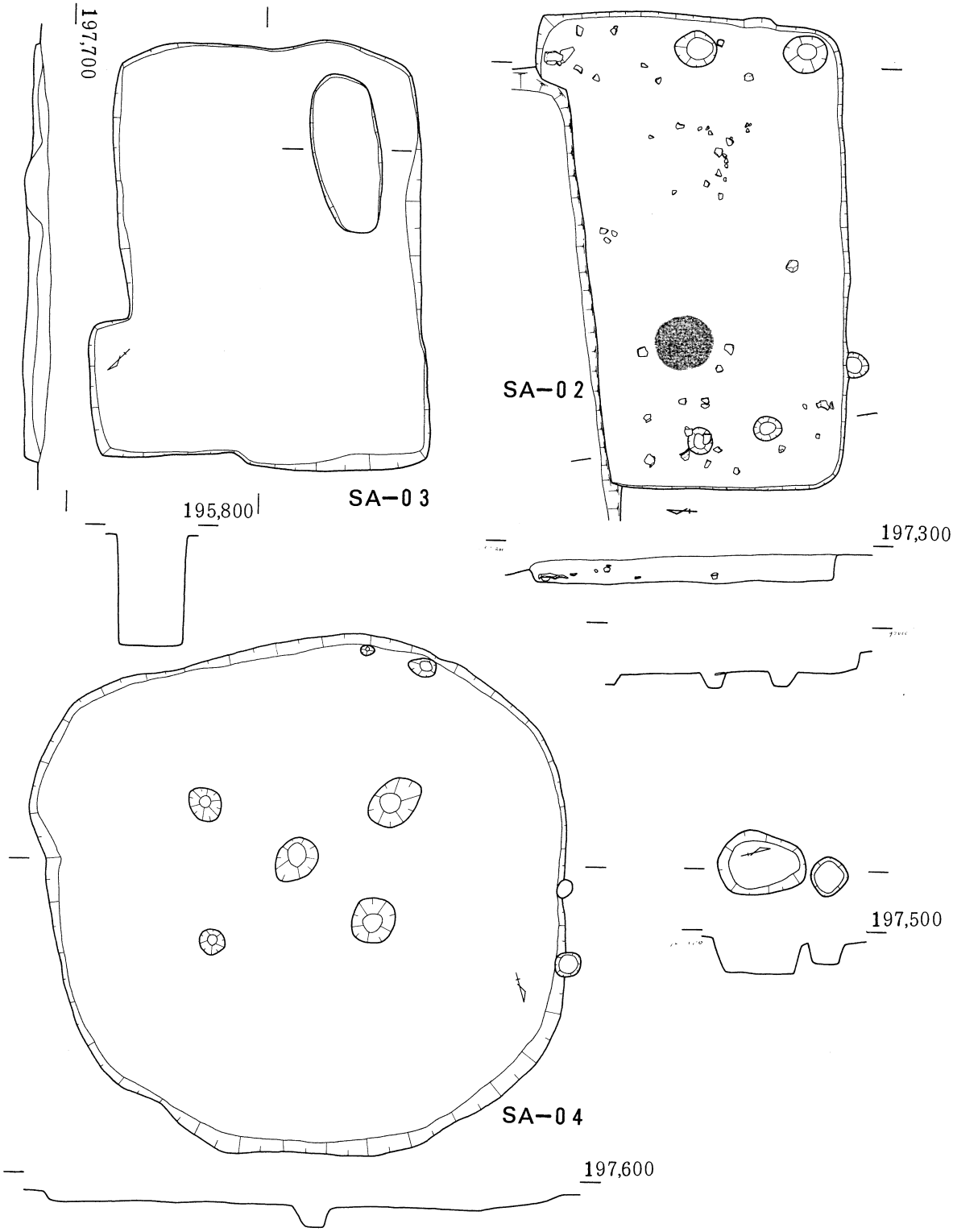
以上のように、権現谷第１遺跡は縄文時代早期と前期、弥生時代後期の複合遺跡であることを確認したが、遺構については出土遺物がきわめて少量のものもあり、大半の埋没時期を明確にすることはできなかった。SA－01については条痕文土器に混じって曾畑式土器が１点出土しており、概ね縄文時代前期以降に埋没したものと想定すべきであろうSA－02は床面直上から弥生時代後期の土器が出土しており同時代に埋没したものとみられる。SA－03についても少量であるがSA－02と胎土や調整が共通した甕の破片が出土しており、同じく弥生時代後期に埋没したものとみられる。これら以外に同時代の遺構や痕跡はみられず、調査面積の狭さや赤ホヤ層の削平等も考慮すべきであろうが、いずれにせよ極めて小規模な集落であったものと想定される。また、平成５年度現在で八重地区所在の遺跡において弥生時代の資料は、未だ本遺跡のみでしか確認されていない。日向型間仕切り住居との関連を含めて検討すべき課題を若干残したが、今後の周辺地区を含めた資料の増加に期待したい。



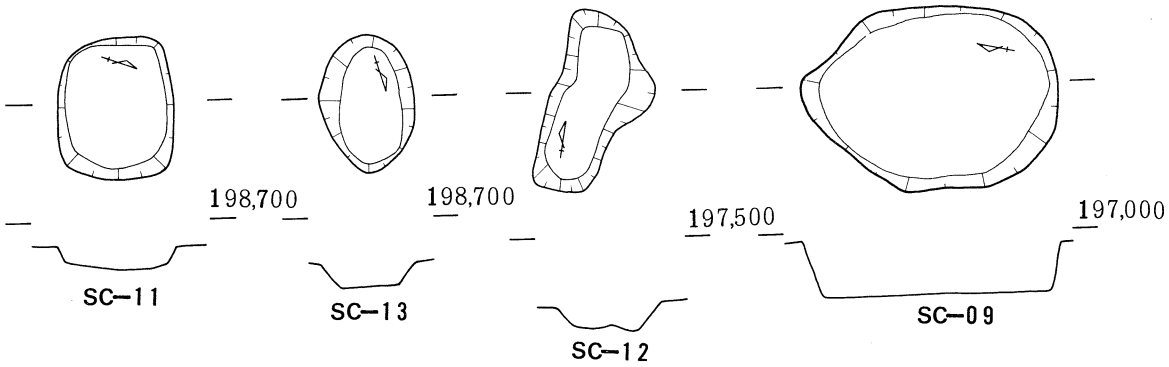
第57図　調査区周辺地形図



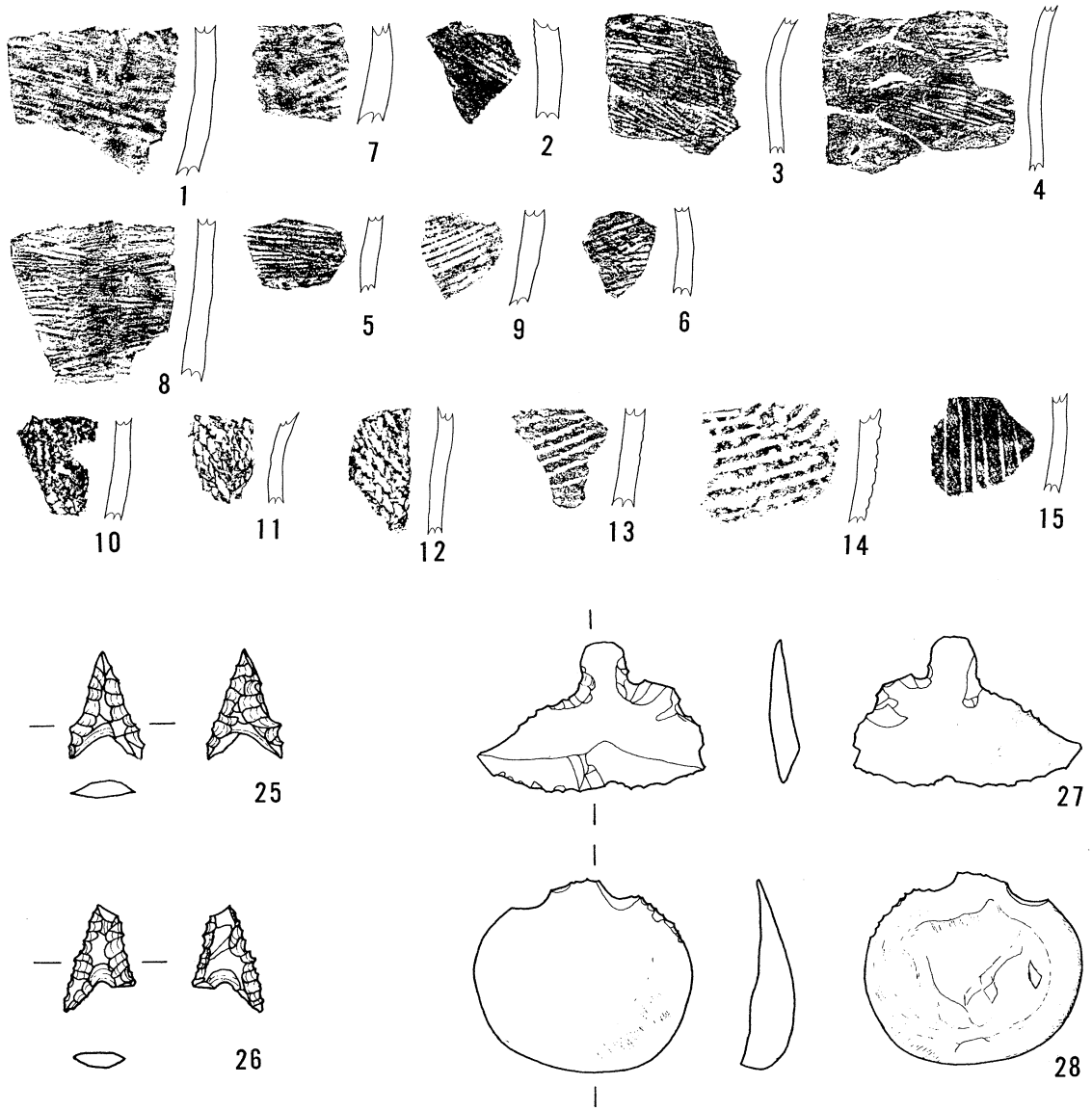
第58図　遺溝実測図（ＳＡ－０１・ＳＣ－０８・１０）Ｓ＝１/６



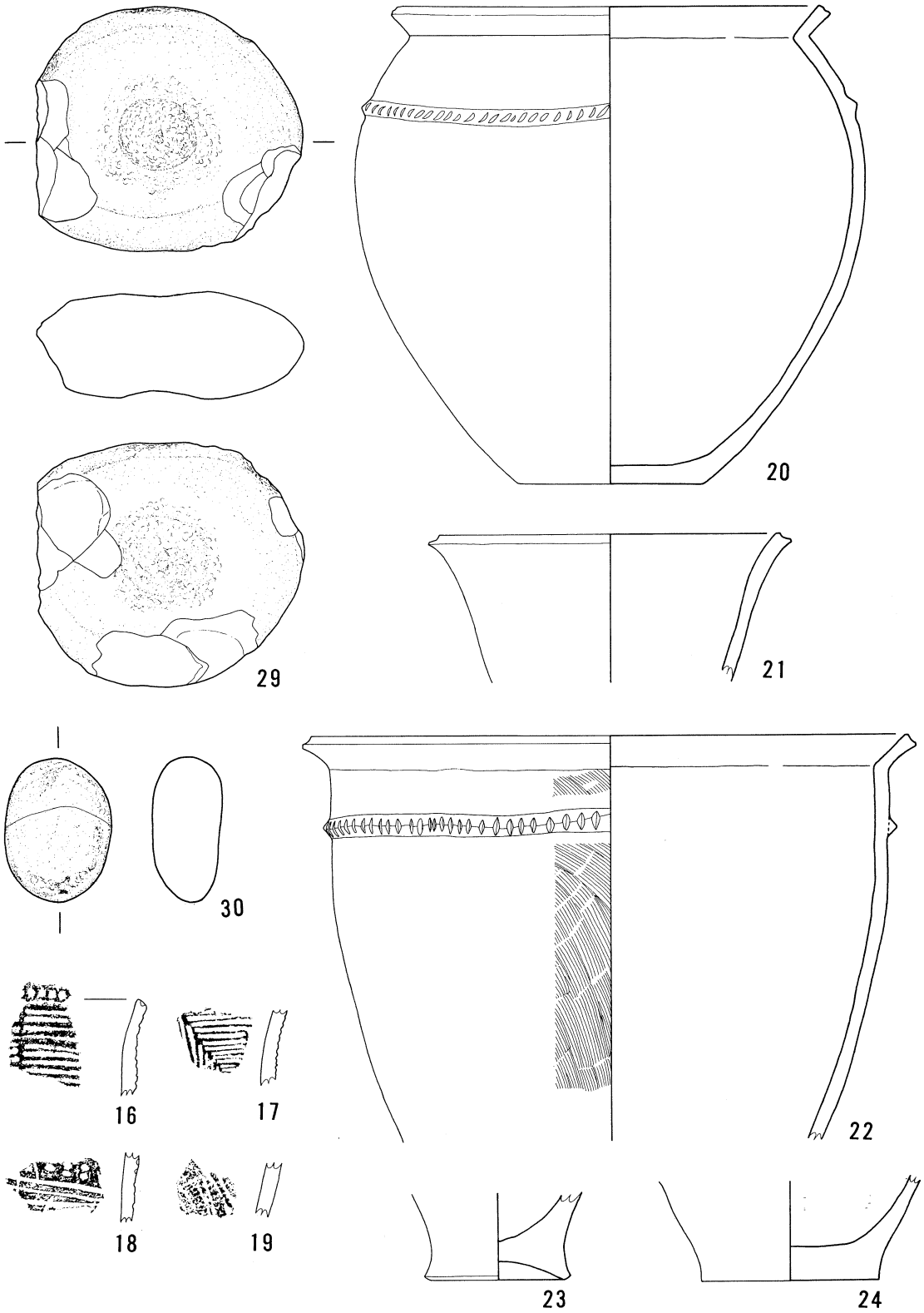
第59図　遺溝実測図（ＳＡ−０２・０３・０４・ＳＣ−０６・０７）Ｓ＝１/６



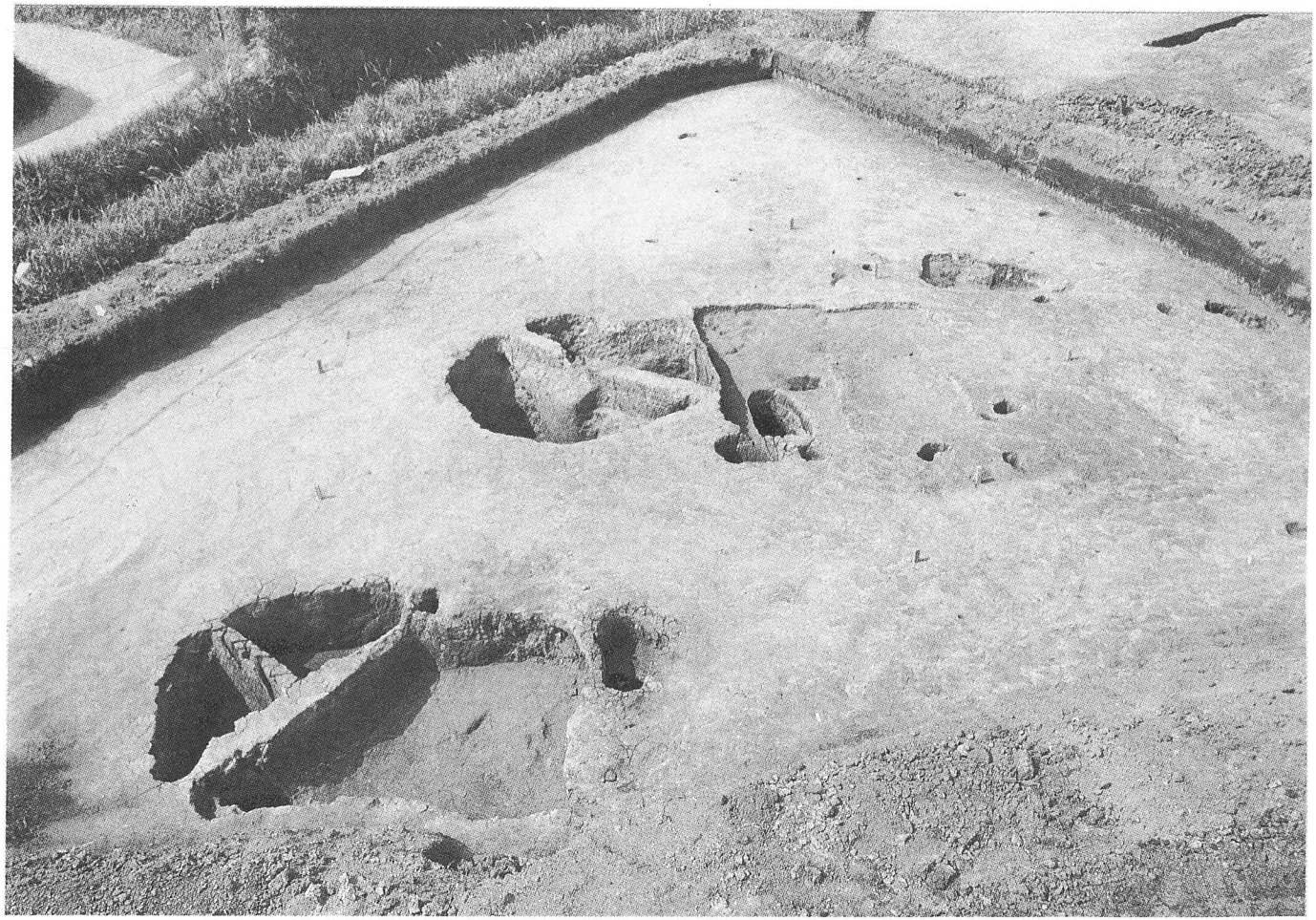
第60図　遺物実測図（ＳＣ－０９・１１～１３）Ｓ＝１/６



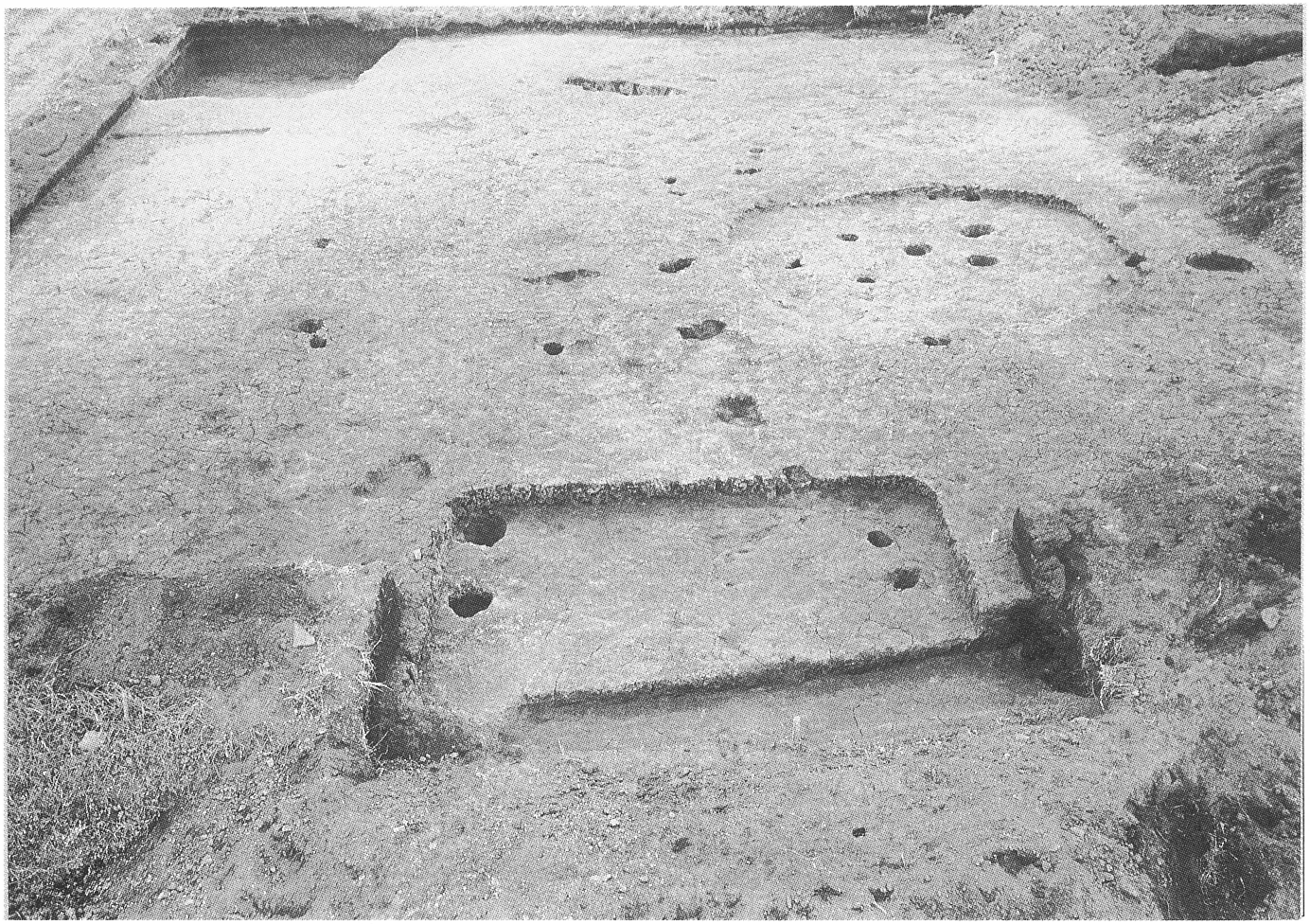
第61図　遺物実測図（縄文土器・石器）Ｓ＝１/３　石器は２/３



第62図　遺物実測図（縄文土器・弥生土器・石器）



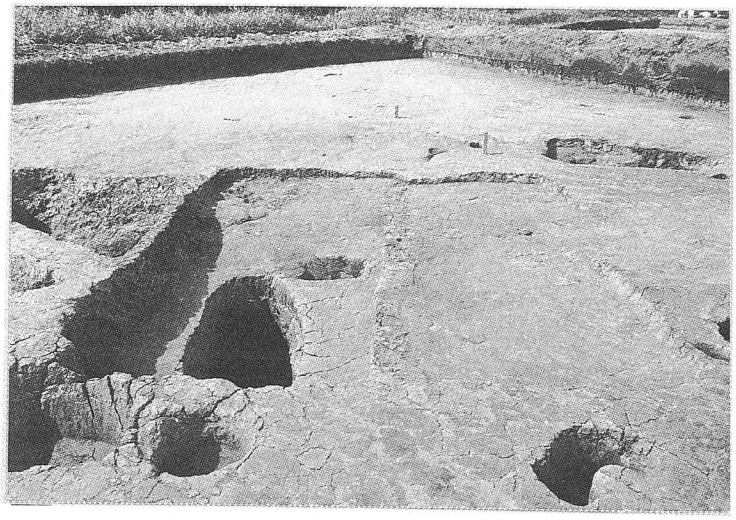
ＳＡ－０３　検出状況



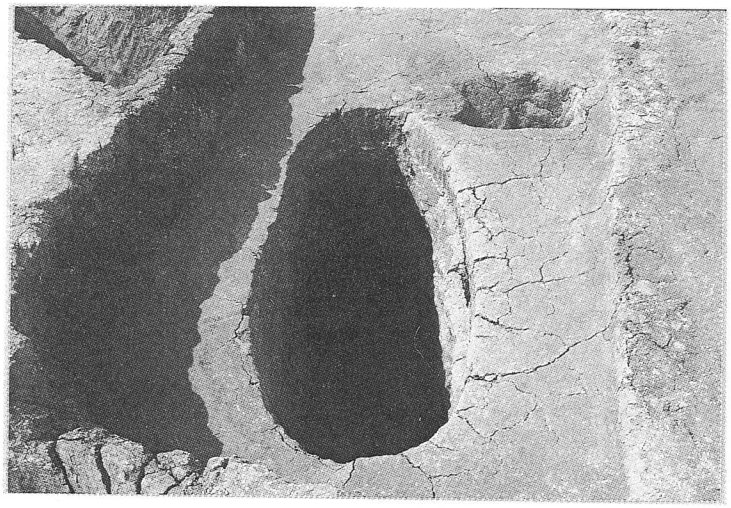
ＳＡ－０２・０４　検出状況

D区　遺構検出状況

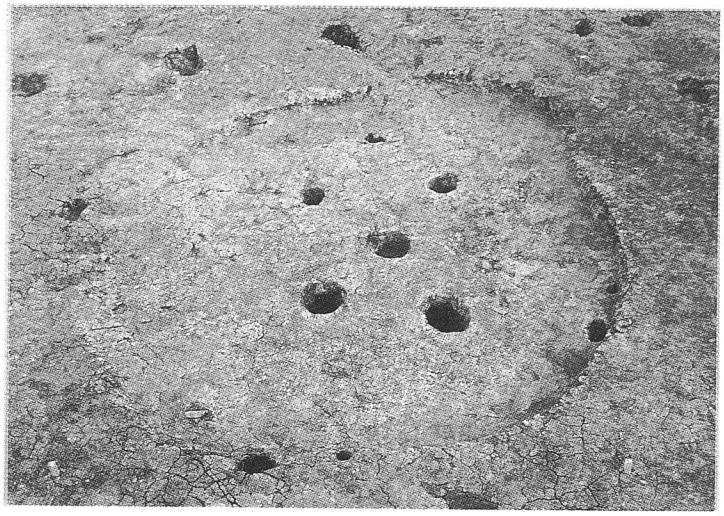
ＳＡ－０２・０４　検出状況



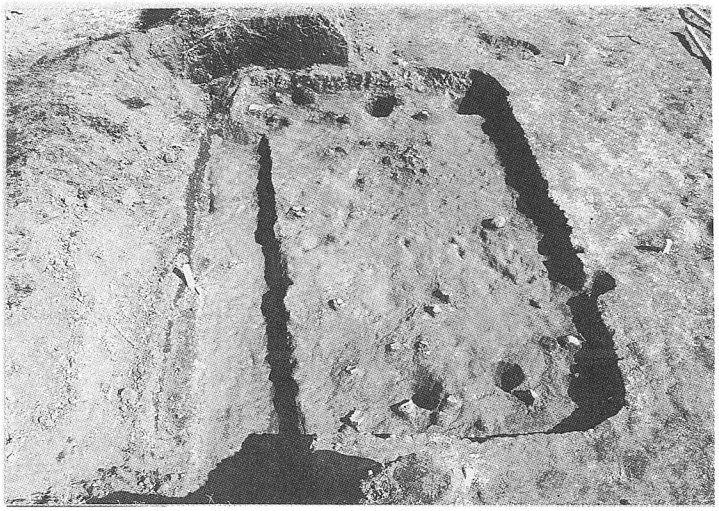
SA－03



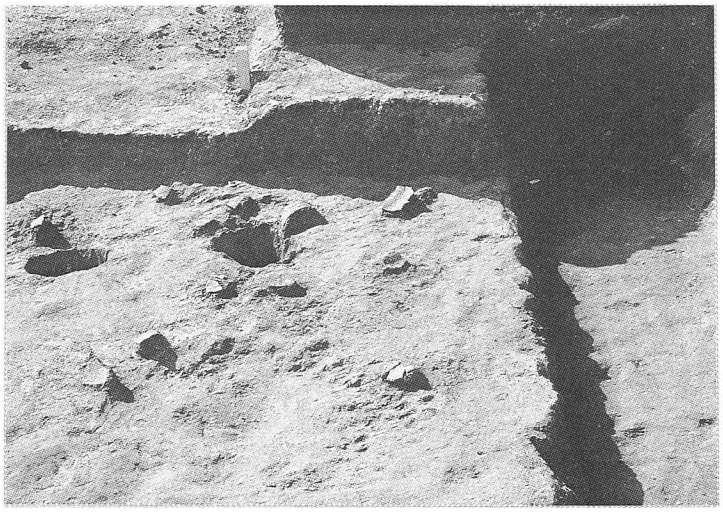
SC－05

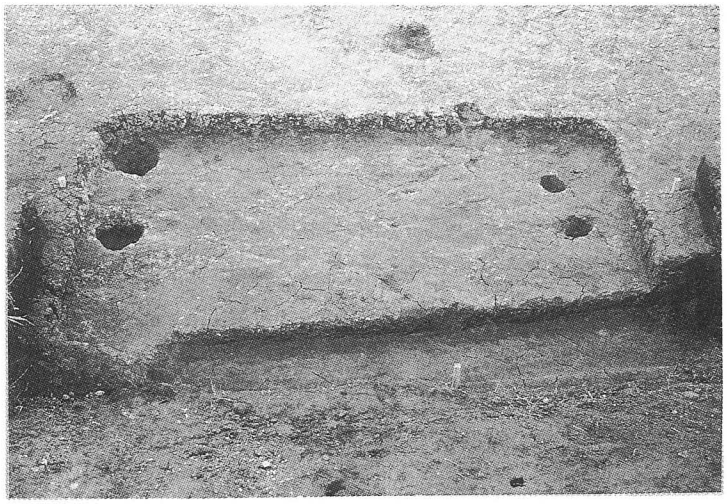


SA－04

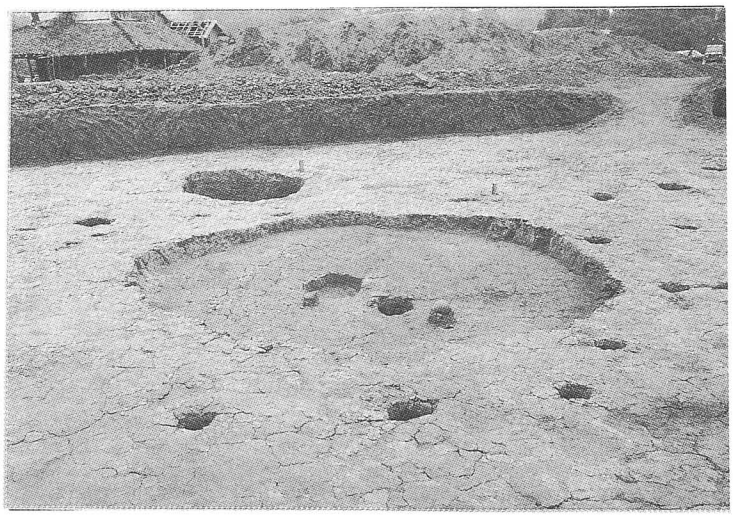


ＳＡ－０２　遺物出土状況



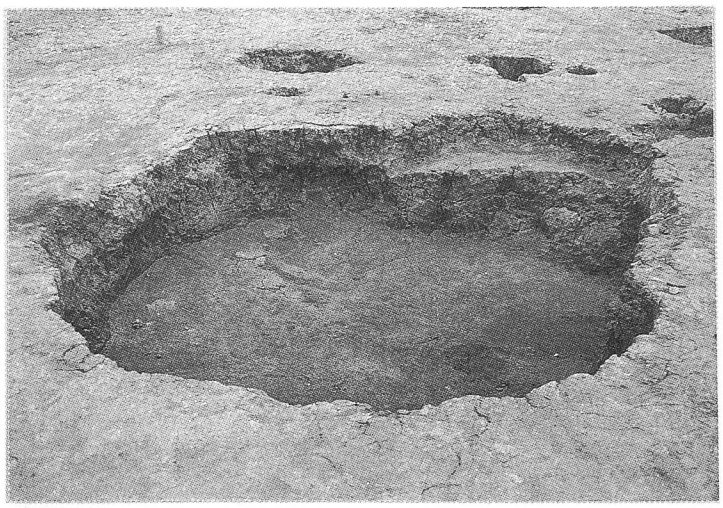


完掘状況

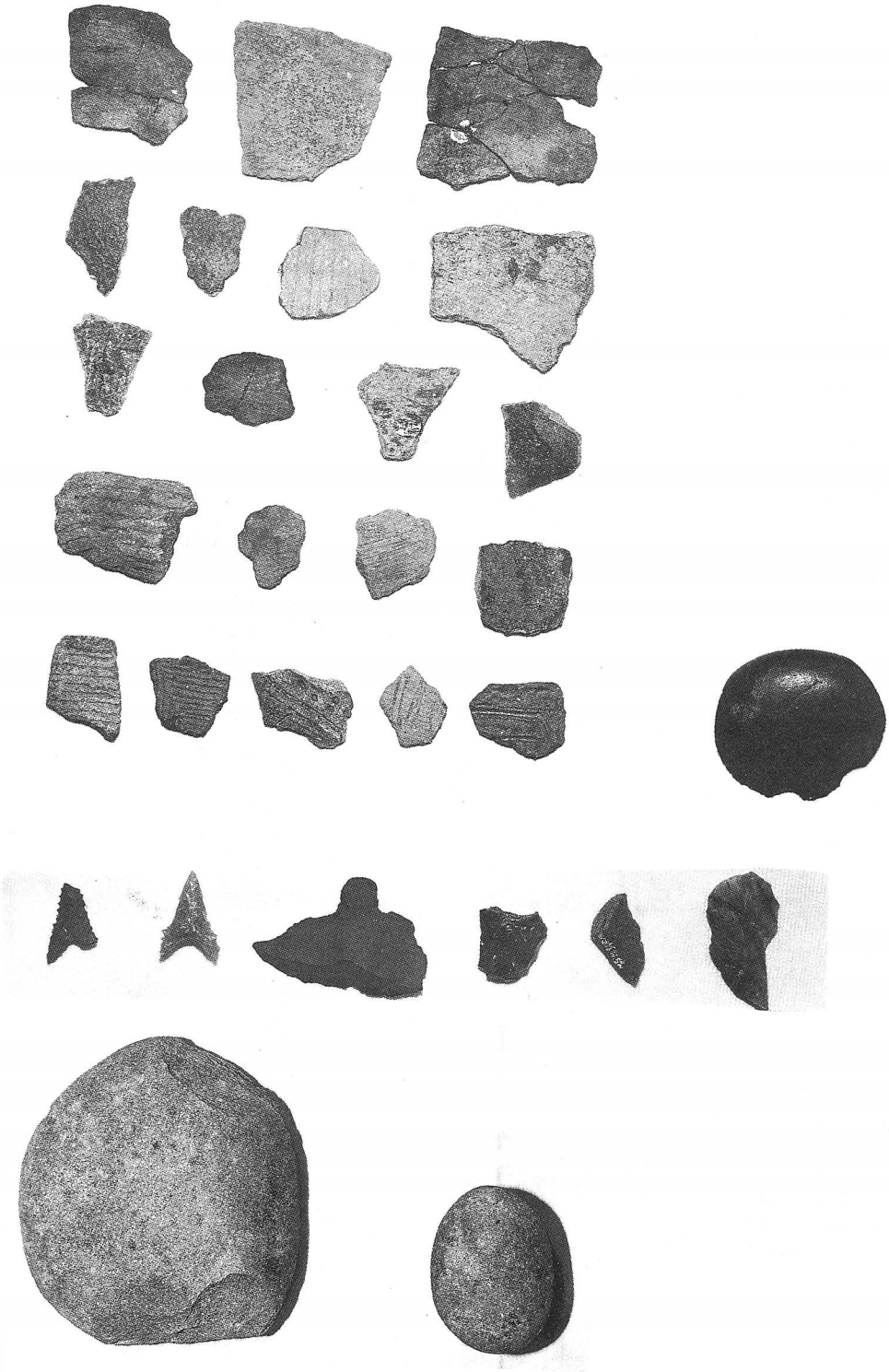


SA－01

SC－08



SC－10



出土遺物（縄文土器・石器）